

平定文(貞文)は平中(へいじゆう)と呼ばれていた。恋愛失敗談が人気だったらしい。「伊勢物語」の格調高きはないが、親しまれていたという。この話は、芥川龍之介が「好色」という小説に、谷崎潤一郎が「少将滋幹の母」のなかでとりあげ、ほかにも瀬戸内寂聴の訳などをはじめ、人気のある話である。

¹ 今は昔、兵衛佐貞文をば平中といふ。色好みにて、宮仕人はさらなり、

人の女など、忍びて見ぬはなかりけり。思ひかけて文やる程の人の、な²びかぬはなかりけるに、本院寺従といふは村上の御母後の女房なり。世の色好みにてありけるに、文やるに、僧からず返事はしながら、逢ふ事はなかりけり。「しばしこそあらめ、遂にはきりとも」と思ひて、物のあはれなる夕暮の空、また月の明き夜など、えんに人の目とどめつべき程を計らひつとおとづれければ、女も見知りて、情は交わしながら心をば許さず、つれなくて、はしたなからぬ程にいらへつつ、人るまじり、苦しかるまじき所にては物いひなどはしながら、めでたくのがれつつ心もとなくて、常よりも繁くおとづれて、「参らん」といひおこせたりけるに、例のはしたなからずいらへたれば、四月の晦ごろに、雨おどろおどろしく降りて物恐ろしげなるに、「かかる折に行きたらばこそあはれとも思はめ」と思ひて出でぬ。

道すがら堪へがたき雨を、「これに行きたらば逢はで帰す事よ」と頼もしく思ひて、局に行きたれば、人出で来て、「上なれば、案内申さん」とて、端の方に入れて往ぬ。見れば、物の後ろに火ほのかにともして、宿直物とおぼしき衣、伏籠にかけて薫物しめたる匂ひ、なべてならず。いとど心にくくて、身にしみていみじと思ふに、人歸りて、「只今もおりさせ給ふ」といふ。うれしき限りなし。則ちおりたり。「かかる雨にはいかに」などいへば、「これにきはらんは、むげに浅き事にこそ」など言い交して、近く寄りて髪を探れば、氷をのしかけたらんやうに冷やかにて、あたきめでたき事限りなし。なにやかやと、えもいはぬ事ども言ひ交して、疑ひなく思ふに、「あはれ遣戸をあけながら、忘れて来にける。つとめて『誰かあけながらは出でにけるぞ』など、煩はしき事になりなんす。立てて帰らん。程もあるまじ」といへば、さる事と思ひて、か

¹ 傍線は読解に役立つ重要語。数字は読解で意識するポイント。

² 今昔物語に比べてモテモテです。

³ 女は男からめでたく
 〓うまく逃れつつ、男
 はそれでこころもと
 なし〓じれつたいと
 いう主語交替。日本
 語には主語の概念が
 ないともいえる。

⁴ これ〓かかる雨、き
 はる〓障、ん〓仮定、
 浅き〓浅い恋愛感情
 しばらく来なかった
 のによく言うよとい
 う感じだが、これを
 訳せ。

ばかりうち解けにたれば心やすくて、衣をとどめて参らせぬ。まことに遣戸たつる音して、「こなたへ来らん」と待つ程に、音もせで奥さまへ入りぬ。それに心もとなくあきましく、現心も失せ果てて、這ひも入りぬべけれど、すべき方もなくて、やりつる悔しきを思へど、かひなければ、泣く泣く暁近く出でぬ。家に行きて思ひ明かして、すかし置きつる心憂き書き続けてやりたれど、「何しにかすかさん。帰らんとせしに召ししかば、後にも」などいひて過しつ。

「大方目近き事はあるまじきなめり。今はさは⁵この人のわろく疎ましからん事を見て思ひ疎まばや。かくのみ心づくしに思はでありなん」と

思ひて、隨身を呼びて、「その人の樋すましの皮籠持ていかん、奪ひ取りて我に見せよ」といひければ、日比添ひて窺ひて、からうじて逃げたるを追ひて奪ひ取りて、主に取らせつ。平中悦びて、かくれに持て行きて見れば見れば、香なる薄物の、三重がさねなるに包みたり。香ばしき事類なし。引き解きてあくるに、香ばしさとへん方なし。見れば、沈、丁子を濃く煎じて入れたり。さるままに香ばしき推し量るべし。見るにいとあきまし。「ゆゆしげにし置きたらば、それに見飽きて心もや慰むところ

思ひつれ。こはいかなる事ぞ。かく心ある人やはある。ただ人とも覚えぬ有様ども」と、いとど死ぬばかり思へど、かひなし。「我が見んとしもやは思ふべきに」と、かかる心ばせを見て後は、いよいよほけほけしく思ひけれども、遂に逢はでやみにけり。

「我が身ながらも、かれに世に恥がましく、妬く覚えし」と、平中みそかに人に忍びて語りけるとぞ。

⁵ これは平中がどう思ったというのか

⁶ 樋すましとは携帯便器のこと。平安貴族女性はおマルを使って用を足していた。それを下っ端の女房に片付けさせていた。

⁷ 平中は女を疎ましく思おうとして行為に及んだが、果たしてどういう結果になったか述べよ。